

クリスマス特需！ケーキ用業務イチゴの最盛期 西尾のイチゴ出荷、冬の繁忙期を迎えます

規模・生産量ともに県内トップクラスを誇るJA西三河いちご部会(清水弘康部会長)は10月24日よりイチゴ出荷を開始しています。

クリスマスを間近に控えた12月上中旬、イチゴ生産の冬の山場を迎え、**最盛期には1日に22,000パックを出荷予定**。クリスマスケーキ用の需要の高まりに合わせて、12月9日頃より業務用イチゴの出荷も開始します。**★特に需要の高い9日から22日までの2週間には約21万パックを出荷(令和2年度)、うち業務用が約7割を占めています。**



あぐりセンター小牧での選果・出荷風景
生産者が輪番制により選別を行っています

「業務用イチゴ」とは…

階級はケーキに適した2L・L・Mの3種。業務用出荷の専用パックは、やわらかい素材を用いてイチゴを置く場所に穴をあけることで荷傷みを避けています。

同部会ではクリスマス前の需要期の出荷に特に力を入れており、安定した出荷量と衛生面・品質面における高品質が大手製菓業者から高い評価を得ています。

■今年のイチゴの作柄(11月16日現在)

例年に比べて5日ほど早く出荷が始まりました。

特に「章姫」の生育が順調で、例年のこの時期と比べて出荷量が伸びています。

■取材対応日■

【日時】12月8日(水) 午後4時30分

【集合】JA西三河 あぐりセンター小牧
(西尾市吉良町小牧梶見堂35)

※あぐりセンター小牧での出荷作業は午後4時30分から午後5時30分頃まで行う予定です。



西尾市のイチゴ生産

～県下でも平均反収が高く、部会員も多数所属～

■ 西尾のイチゴ生産の特徴 ■

JA西三河いちご部会では77人の生産者が高設栽培(章姫／一部、紅ほっぺ)・土耕栽培(紅ほっぺ)で年間960トンのイチゴを生産。この2品種に集約して有利販売へつなげています。

クリスマスケーキ用の需要が高まる(＝単価が高まる)12月上中旬に一番果のピークを迎えられるように栽培していることが特徴。8月頃にイチゴの苗に夜冷処理を施して花芽を分化させ、秋からの収穫・出荷を可能としています。農業用ICTツールの活用にも積極的で若い世代を中心に15人が導入。ハウス内の温湿度や二酸化炭素濃度を見える化し、最適なハウス環境の構築をめざしています。



「バンカーシート」を設置するイチゴ農家

■ 「虫」をもって「虫」を制す

天敵利用など環境にやさしい防除を実践 ■

同部会では農薬の利用抑制とコスト低減・省力化のため、天敵を利用した防除を行っています。2015年より、イチゴの重要害虫であるハダニの発生を抑えるため、天敵資材「バンカーシート」を導入。

その他にも高濃度CO2ダニ防除機やCO2局所施用、生物農薬・リモニカスカブリダニの試験にも取り組み、生産性の向上を図っています。

■ 新規就農者向け栽培講座も開校中！ ■

JA西三河いちご産地振興委員会は2019年6月より、施設栽培イチゴの就農支援プロジェクト「いちごスクール」を開校しています。スクール受講生は西尾市内のイチゴ農家のもとで研修。現在、3期生4人がスクールを受講中です。

「いちごスクール」とは、施設イチゴ栽培での就農を目指す方を対象とする就農支援プロジェクト。栽培技術などを生産者が直接指導する実務研修から、経営研修・農地取得・補助金申請などをセットに、新規就農・Iターン就農者を専業農家まで育成します。

詳しくはJAホームページをご確認ください。⇒



【生産者部会情報】

名称：JA西三河いちご部会

出荷量：988ト (令和2年度実績、業務用出荷含む)

部会員数：77人 耕作面積：約16.5畝 流通先：愛知県・石川県・新潟県

収穫期：10月下旬～6月 (最盛期は4月頃の見込みです、平年通り)

(全国の生産概況)

全国のイチゴ出荷量：146,800ト

愛知県のイチゴ出荷量：9,850ト (栃木、福岡、熊本、長崎に次ぐ5位 東海地方では1位)

データ：農林水産省 作況調査(野菜) 令和2年産統計表

https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_yasai/attach/pdf/index-4.pdf